

奥村昭雄先生の意見書（8月19日付）についての私の意見

2010年8月29日

香山 壽夫

次回のヴィジョン検討会は、外国出張のため出席できませんので、主要な点について書面で述べさせていただきます。

1) 全体計画とは、「今ある愛知芸大のキャンパスそのものである」という考え方は、そのとおりだと私も思います。私に限らずこれまでのほとんど全ての意見がこのキャンパスの環境全体を評価し、将来共大切にしていきたい、すなわち将来計画の出発点にしようと考えていたと思います。すなわちマスター・プラン（全体計画）の基本は、現在のキャンパスであることは改めて述べるまでもなく、全ての議論の前提になっていると思います。

ところで、その上で、全て計画というものは、具体的に何から着手するかという判断が求められているわけで、そのためには「ヴィジョン（展望・見通し）」が定立されなければならない、それが今求められていることだと私は受けとっております。

2) 音楽学部に増築が必要か？

将来の施設規模算定については、私は判断材料も判断能力もありませんので、申し上げることはありません。大学当局、そしてファシリティ・マネージメントを専門とされている委員の判断に従いたいと思います。

3) 音楽学部棟の改修について

耐震性能を向上させるためには、減築もひとつの方法であることは確かでしょう。しかし、一番の問題は音楽レッスン室として求められている音響空間条件が達成できるかどうかにかかっています。その方法が具体的に示されて始めて残すという判断を選ぶことになりましょう。

4) 奏楽堂は残したい

私もそう申し上げてきました。キャンパス空間全体の要となっている建物であるからです。私が申し上げたことは、残すために、もし音楽堂として条件が満たされないなら（空間ヴォリューム等々）、他の用途（たとえば大講堂）としても充分に使えるだろうということに過ぎません。

5) 美術学部棟の屋根を二重にする

これは、私も同意見で先に（7月19付）に申し上げたところです。

6) 宿泊棟等を残したい

これについては、有効な利用方法があればぜひそうしたい。しかしその方法が見出せなければ建物を残しても意味がない。これもこれまで保存の一般理念として、申し述べてきたとおりです。

7) 公開国際コンペについて

コンペを行うためには、設計条件（施設規模、内容、等・・・）が確定されていることが前提になります。今の愛知芸大のキャンパスで求められているのは、それ以前の段階でそもそも何が問題であるか、何がなされねばならないのか、その「問題探索」の作業です。その段階のものを公開コンペにかけることが可能だとは、私には考えられません。